

---

# Stück の多機能性

—部分、疑似部分、助数詞、名詞アスペクト標識—

出島 恒太郎

## 1. 序論

ドイツ語の Stück の語の意味は、歴史的にも、現代の用法においても共通して部分を表す。部分はそれ自体よりも大きい存在物、または複雑な構造を有した存在物を前提としている。そのように考えると、部分は物理的にまたは概念的に切り離すことが可能な存在物を表すと想定できる。

ドイツ語の Stück や Teil などの部分を表す語彙項目<sup>1)</sup>には、以下のような純粋な部分 („True-Partitive“) 用法がある (cf. Seržant 2021)。純粋な部分用法は以下の様に部分を表す語を伴い、かつ部分に対する全体を表す標識 (前置詞 aus または属格) が存在する。

(1) ein Stück aus dem Buch vorlesen 「本から一節読み上げる」

(2) ein defektes Teil eines Gerätes ersetzen 「器具の故障した部分を取り換える」

Stück にも Teil にも上記のような自立した名詞句としての用法があるが、さらに Stück には構文に組み込まれた用法もある。それが下記の助数詞構文 (Numerativkonstruktion) の Stück の用例である (詳しくは 2 節を参照)。

(3) ein Stück Schokolade essen 「チョコをひとかけ食べる」

同様に Teil に関しても助数詞構文と同形式で量化を行うことができる例が存在するが、これは Stück に対して、助数詞句 ein (gut) Teil が部分の意味を失っており、ほとんど viel 等の量化表現と同様に機能している。ここで量化とは Zifonun (2010) で想定される量化修飾のことであると理解されたい<sup>2)</sup>。詳しくは 3.1 節で述べるが、概略、数詞などの量子子によって表される。

(4) ein gut Teil Dreistigkeit 「かなりのずうずうしさ」

上記までの例において Stück は本来的な固有の意味に従い部分を表してきたが、

---

1) Stück と Teil 語義の差異は大まかに以下の様にまとめることができる: Stück は全体から切り離された部分であり、Teil は全体を構成する部分である。

2) 形式論理学の伝統における量子子 (Quantor) による項の束縛は特段想定しないものの、形式化の可能性やその必要性とは別問題である。

以下の Stück に関するよく知られた用例はそれと異なり、多くの先行研究によって類別詞言語における（数詞）類別詞<sup>3)</sup>と考えられてきた<sup>4)</sup>。

(5) zwei Stück Vieh 「家畜二頭」

[Num+N1+N2]

助数詞構文の構成は [ 数詞 (Num) + 助数詞 (N1) + 関連名詞 (N2) ] のように表す。先行研究は (5) の Stück は部分ではなく単位であると分析する (cf. Löbel 1986; Krifka 1989; Wiese 2011)。しかし N2 の位置に現れる名詞 Vieh は集合名詞と考えられるので、部分表現の一種であるという分析を中心に考えられなくもないだろう。

部分、助数詞そして類別詞用法の Stück の用法分類間には除かれてしまっている連続的な例が存在している。なぜなら、Stück は N2 に (3) の不可算名詞や (5) 集合名詞のみならず、単数個体名詞 (9) や複数名詞 (11), (12) なども容認されるからである。

(6) ein Stück Holz

(7) ein Stück Brot

(8) ein Stück Seife

(9) ein Stück Auto (Blühdorn 2006: 68)

(10) ein Stück Vieh

(11) 40 Stück Wäscheklammern (DWDS)

(12) fünf Stück Hasen (Bauer 1912: 267)

また、Löbel (1986) および Zifonun (2012) は助数詞構文に関連させて、語に後接して新たな語を形成するプロセスをそれぞれ、複合 (Komposition) または疑似接辞 (Affixoid) による派生であると言及している。

(13) Fleischstück

3) Aikhenvald (2006) においては名詞の範疇化の手段として類別詞には、名詞類別詞 („Noun Classifiers“)、数詞類別詞 („Numeral Classifiers“)、所有構文における類別詞 („Classifiers in Possessive Constructions“)、動詞類別詞 („Verbal Classifiers“)、場所格類別詞 („Locative Classifiers“)、直示類別詞 („Deictic Classifiers“) が挙げられている。数詞類別詞である場合、数詞と結びつく。しかし、ドイツ語の助数詞または類別詞は指示詞とも結びつく。

4) もっとも、Stück のみを類別詞と見なすか、それ以外の語にも類別詞のステータスを与えるのかという点、そしてその論拠づけについては研究者によって相違がみられる。

本論は上記の Stück の意味・機能の広がりについて用例を観察して行き、その際 Stück の有する複数の機能には連続性が存在していながらも、存在物の部分を表す意味から全体を表すようになる意味変化の境界の特定と、意味拡張の仕方について説明を与えることを試みる。

## 2. 先行研究

### 2.1. Stück の基本義と語源

Stück の基本的な意味は全体から切り離すことができる部分のことである<sup>5)</sup>。いくつかの先行研究においてもそのことが示されている<sup>6)</sup>。

„Bei uns erscheint in solcher Funktion [von Numerativ] das Wort „Stück“. Ursprünglich nur den Teil eines zerlegbaren festen Stoffes bezeichnend, („ein Stück Holz, Fleisch, Brot, Kreide“ usw.) wird es mit einer Art Bedeutungsverschiebung auch für das abgeschlossene Einzelding gegenüber dem Kollektiv- oder Gattungswort gebraucht („drei Stück Vieh, fünf Stück Hasen“ usw.).“ (Bauer 1912: 267)

そのような（助数詞の）機能で Stück という語は我々のもとに現れる。起源としては分解可能な固まった素材の部分を表していたが、（ein Stück Holz, Fleisch, Brot, Kreide など）一種の意味の推移を伴い集合や種を表す語に対し完結した個々の物を表すためにも用いられる。（訳・カッコ内筆者）

„Der allgemeinen Bedeutung von *Stück*, die zurückgehend auf die Wurzel *steug* ‚stoßen, schlagen, abhauen‘ als ‚(abgetrennter) Teil eines konkreten Objekts‘ (wie in *Endstück*)

5) Stück は Kluge (1883) および Kluge (1989) によって “Stock“ に語源を持つ語であると考えられているが、これに対して Grimm (1854) においては “steug ‘stossen, schlagen, abhauen’“ に語源を持つ語であると考えられている。

6) Grimm (1854) においては概略以下の様な Stück の意味変遷が記述されている：

I. , fragment ‘, , teil ‘.

1) entsprechend dem ursprung des wortes ist stück vorerst willkürlich oder gewaltsam abgetrennter teil eines grösseren ganzen.

2) ablassend bezeichnet stück nicht mehr den losgetrennten teil, sondern etwas innerhalb eines ganzen bloss erkennbar herausgehobenes oder für sich stehendes. je nach dem zusammenhang ergeben sich hierbei einzelbedeutungen in zweifacher richtung.

II. frühzeitig entwickelt sich aus der ursprungsbedeutung eine weitere, in der stück aus der beziehung zu dem grösseren ganzen gelöst ist und nun selbst ein ganzes, einheitliches, in sich geschlossenes bedeutet.

beschrieben werden kann, stehen in vielfältiger Weise angereicherte Lesarten zur Seite, vor allem die im Kompositum frequente ‚literarisches Erzeugnis, auf der Bühne dargestellte Dichtung, Theaterstück‘ wie in *Ballettstück*, *Einpersonenstück*, *Skandalstück*.“ (Zifonun 2012: 127)

文学作品、舞台上で歌われる詩、*Ballettstück*, *Einpersonenstück*, *Skandalstück* などの舞台作品などの、とりわけ複合語において頻繁に表れる、様々な方法で富まされた読みが、具体的な対象物の（切り離された）部分（*Endstück* のように）‘である語源 *steug*, 突く, 叩く, 切り落とす‘に起源を求めて記述されうる *Stück* の一般的な意味を援助する。（訳筆者）

この基本的な（歴史的）意味を抑えた上で、以下 *Stück* の用法についての先行研究を概観していく。

## 2.2. 助数詞 *Stück* の分析

Murelli (2017) は、助数詞（構文）の機能を以下の様に記述している。

„Die Funktion von Numerativkonstruktionen kann der funktionalen Domäne der nominalen Quantifikation zugeordnet werden [...]. Primär dienen Numerativkonstruktionen dazu, Entitäten in der Extension von kontinuativischen NP-Kernen zählbar zu machen [...] sowie, im Fall von individuativischen NP-Kernen, Entitäten als Ensembles zu gruppieren [...].“ (Murelli 2017: 1700)

助数詞構文の機能は名詞量化の機能領域に割りてられる [中略]。一次的には助数詞構文は、連続的な NP の核の外延にある存在物を可算にすること、および、個体的な NP の核の場合は、複数の存在物をまとまりとしてグループ化することに寄与する [中略]。（訳筆者）

---

7) 他方で Murelli (2017) は助数詞構文による可算名詞と不可算名詞の区別だけではなく、範疇変換の機能についても指摘している。

Daraus folgt einerseits, dass die Individuativ-Kontinuativ-Unterscheidung auch bei den Numerativkonstruktionen eine Rolle spielt, wie es sich immer wieder erweisen wird; andererseits haben Numerativkonstruktionen funktionale Ähnlichkeiten zur Kategorisierung Numerus, insbesondere zum Phänomen der Umkategorisierung [...]. Murelli (2017: 1700)

ここで連続的な NP の核と言われているのは、おおよそ名詞句主要部の不可算名詞のことであり、個体的な NP の核は可算名詞に相当する。

Murelli は助数詞構文の実現形態に対して、N2 の 3 種類の形式を認めている：同格、属格、そして前置詞の結びつき。同格の際は量化の読みが、前置詞の際は質の読みが前面に現れるという (cf. Murelli 2017: 1712)。

助数詞には研究者によって異なる数と種類の下位分類が設けられる。Löbel (1986) は Stück を助数詞の二つの下位分類に割り当てる。ひとつは Wiese (2011) が形状名詞 (Gestalt-nomen) と呼ぶところの助数詞であり<sup>8)</sup>、もう一つは類別詞である<sup>9)</sup>。(14) の形状名詞の例は、文字通り形状を N2 名詞に割り当てる機能を有する。しかし、ここで Stück が厳密にどのような形状を表すのかは明示できず、N2 に対して相対的であるとされる。それに対して (15) は類別詞であると分類される。

(14) ein Stück Schokolade essen = (3)

(15) zwei Stück Vieh = (5)

Stück を類別詞と見なす分析は実際数多く存在するが、量化の観点から論じる立場と類別の立場から論じる二つに大きく分けられる。Löbel の立場は前者に属する。この立場に立脚する主張は、類別詞言語の名詞に関する次のような意味観に強く依拠している。それは、類別詞言語における名詞は数超越的 (transnumeral) であると主張するものである<sup>10)</sup>。数超越的な名詞は単数 - 複数の数の指定が定まっ

8) Löbel (1986) は形状名詞に“Numerativ”という用語を用いている。しかしこれは本稿の上位概念としての Numerativ とは異なり、下位分類の一種である。Löbel (1986) が上位概念として用いるのは、助数詞ではなく、量化名詞 (Quantifizierendes Nomen) である。Löbel は „Numerativ“ に境界範疇的な性質を見出している。

Diese „Zwischenkategorie“ entspricht unseren Numerativa. Daß „die Substanz nicht genau festgelegt ist“, findet sein sprachliches Korrelat in der Tatsache, daß diese Numerativa relational sind, d. h. einer Ergänzung eben hinsichtlich der Angabe einer Substanz bedürfen. (Löbel 1986: 15)

9) Löbel の分析に続き、Krifka (1989)、そして Wiese (2011) などもドイツ語の Stück を類別詞と分析する。Löbel は Stück が唯一の類別詞と考えたのに対して、Krifka は Kopf を、Wiese は Blatt および Mann も類別詞に数え入れる。

10) Metzler (2016) は数超越性を以下の様に記述する。

„Neben diesen N[umerus]systemen, die vom Sg. als primärer natürl[icher] Einheit ausgehen und andere N[umerus]kategorien als markiert betrachten, existieren auch Spr[achen], die in ihren N[umerus]systemen den Gegensatz von Sg. und Pl. zunächst unbezeichnet lassen. In diesen Spr[achen] bildet das sog. transnumerale Nomen mit seiner numerusundifferenzierten Kollektivbedeutung die

ていない名詞のことである。類別詞言語における類別詞の役割は、離散的な存在物を示しているながら数の定まっていない名詞を量化するために存在すると考える。また Stück はそのような数超越的な名詞と類似するような集合名詞、Vieh, Obst などと密接に結びついて用いられるという<sup>11)</sup>。

しかしながらこの数超越性に関する議論について、Imai/Kanero (2021) の心理言語学的実験によって疑義が投げかけられている。Imai/Kanero は日本語のような類別詞言語においても可算と不可算の区別があり、個体類別詞と不可算類別詞によって区別することができると思う。従って類別詞の有無いかんで、名詞単独の意味が定まるとは言えないのではないか。よって筆者は類別詞言語の名詞が数超越性を示すことで、同時に意味的な数が定まっていないという主張は含意しないと思う<sup>12)</sup>。数超越性は形態統語的な特徴であり、意味的な特徴ではない (cf. Wiese 2011)。形態の特徴：当該名詞には複数 (および単数) の標示がない。統語の特徴：数詞との直接の組み合わせが不可能である。これに依拠して、類別詞言語の名詞の意味の領域についても、数の区別が行われていないと考えるのは西洋言語中心的な見方であり、確かな主張ではない。実際このような見解に基づく言語分析は存在する<sup>13)</sup>。

---

**primäre N[umerus]einheit. N[umerus]differenzierungen zwischen Sg. und Pl. sind sekundär und finden ihren grammat[ischen] Ausdruck in komplexen, von der Grundform abgeleiteten Formen.“ (Metzler 2016: 474)**

このような、単数形を、根源的で自然な単位とし、これを元に、そして他の数範疇を有標と見なすような、数体系に加えて、数体系においてさしあたり単数と複数の対立を非表示にしておく言語も存在する。このような言語において、いわゆる、数の区別のない集合的な意味を有する、数超越的な名詞は根源的な数単位を形成する。単数と複数の間の数の区別は二次的であり、複雑な、基本形から派生した形で文法的に表現される。(訳・下線・強調およびカッコ内筆者)

- 11) その他の研究者は次のように分析する。類別詞の Stück と共起する名詞である Vieh は集合名詞であり、Stück は「自然単位」を表すとされる (Krifka 1989: 67)。Wiese (2011) は類別詞の機能というのは、N2 集合名詞の「指示対象の個体化」にあるという。
- 12) Metzler (2016) の次のような注意も示唆的である。

„Keinesfalls ist die sprachl[iche] Erfassung der außersprachl[ichen] Objekte mit einer Widerspiegelung ihrer Eigenschaften gleichzusetzen, d. h. dass der N[umerus] als grammat[ische] Kategorie grundsätzl[ich] nicht eine natürl[iche] Anzahl bedeutet.“ (Metzler 2016: 474)

決して言語外の対象を言語的に捉えることをその性質の反映と同一視してはならない。すなわち、文法範疇としての数は基本的に自然における数を意味しないということである。(訳およびカッコ内筆者)

- 13) Zifonun (2004) に基づく Blühdorn (2006) は、このような西洋言語に存在する名詞における単数と複数の区別や数詞の直接付加の可能性から離れて名詞の数の意味論を考え

### 2.3. Stück の複合または疑似接尾辞用法

Löbel (1986) および Zifonun (2012) においては Stück を基にした新たな語を形成するプロセスが取り上げられている。Stück はこの時、別の要素に後接して新たな名詞を形成する。

(16) Fleischstück = (13)

Löbel はこの時 Stück を複合語の第二要素 (zweites Glied des Kompositums) という。彼女は、Stück が助数詞構文において形状名詞として用いられることと対応し、複合語形成がなされると説明する。Stück が形状名詞であるため、この時 N2 は不可算名詞となる。助数詞構文によって表されるのは量 (Mengen) であるのに対して、複合 (Komposition) によって形成された名詞は存在物 (Gegenstand) を表す (cf. Löbel 1986: 132)。Stück が (ひいては形状名詞が) 複合語の主要部として用いられる場合、量 (Quantität) ではなく性質 (Qualität) が表されると言われる。

Zifonun (2012) は、-stück が名詞アスペクト (Nominalaspekt) を表示するための標識、疑似接尾辞 (Suffixoid) であると考える。名詞アスペクトは特定のザインズアルト (存在様式 („Seinsart“)) を有する名詞本体に形態論的操作を加え表示され、Singulariv または Kollektiv のいずれかの標識を伴い現れる。Seinsart は動詞のアクチオンズアルト (Aktionsart) と類推的な概念であり、名詞単独が表す素性によって分類される。素性には、土形 (Shape) (定まった輪郭を有するか否か) の 2 値および土と均質性 (Homogeneity) の 3 値がある。素性の組み合わせに基づき、6 種類のザインズアルトが導かれる。ドイツ語において特に問題となるのはそのうち、不可算名詞 (MASS NOUN) および単数対象名詞 (SINGULAR OBJECT NOUN) である。

表 1 : < ザインズアルトに基づく名詞の分類 >

素性	( $\emptyset$ 均質性)	(- 均質性)	(+ 均質性)
(-形)	一般名詞 (General noun)	分類名詞 (Sort noun)	<u>不可算名詞</u>
(+ 形)	集合名詞 (Set noun)	<u>単数対象名詞</u>	総称名詞 (Collective noun)

る立場である。Blühdorn は名詞の複数性というのは、名詞という単独の言語要素から導かれるのではなく名詞句として実現された際に問題にすることができるのであり、すなわち名詞句のレベルの性質であると考える。よって名詞には純粋に概念を示す機能しかないと考える。

名詞アスペクトは上記いずれかのザインスアルトが割り当てられる名詞語基に、名詞アスペクト標識である *Singulativmarker* (17) と *Kollektivmarker* (18) のどちらかを割り当てる形態論的操作によって表される。*Singulativmarker* は一つの存在物から成り立つ集合を、*Kollektivmarker* は複数の存在物から成り立つ集合を示す (cf. Rijkhoff 2004)。

(17) *Schmuckstück, Gebäckstück, Geldstück, Erbstück* (=1b)

(18) *Zuckerwerk, Liedgut, Bettzeug* (=3a)

(Zifonun 2012: 101)

この時、語の第二要素として現れる *Stück* は意味的に漂白された要素であると考えられている (cf. Zifonun 2012: 101)。また *Singulativ* を表示する標識には他に“-korn, -bohne, -halm, -kopf“ (Zifonun 2012: 105) などがあるとされるが、これらは *Stück* と異なり文法化があまり進行していないと主張される。また、集合を表す標識には他にも、*Ge-* や *-schaft* や *-tum* などすでに多くの研究で論じられてきた接辞も含まれる (cf. Zifonun 2012: 106)。

Löbel が説明するところの、複合語が有する形状を表す機能は、Zifonun による名詞アスペクトの標示という説明と同様に、接尾辞としての *Stück* を部分ではなく単一の存在物を表す手段と分析するに至っている。本来部分を意味する語が存在物全体を表すようになるというような意味変化は、さほど劇的ではなくとも、有意な変化に違いない。よって、この部分から全体への移り変わりには少なくとも段階が存在するのではないかと仮定したくなる。なぜならば、例えば、*Singulativmarker* を有する言語である *Asmat* 語および *Koasti* 語において *Singulativmarker* は同時に縮小辞 (*Diminutiv*) を表すことが、Rijkhoff (1991: 302) によって示されている。*Stück* においても同様に縮小辞的な、小さな存在物を示す用法が存在しているということは想像に難くないであろう。*Stück* は本来的に部分を表す語であり、部分とは全体に対して小さいという含意は常に成り立つからである。例えば以下の例は、この主張をいくらか支持する用例ではなかろうか。

(19) *Musikstück; Frühstück; Rundstück* (複合語第二要素または疑似接辞としての *Stück*)

(20) *ein Stück Arbeit* (助数詞としての *Stück*)



以上、Stück の分析に関する先行研究を見てきたが、助数詞用法と名詞アスペクト標識のいずれにおいても量化に焦点が置かれていたことが分かる。Löbel は形状名詞および複合語用法の Stück に質的な修飾を見出していたが、いずれも詳細に扱っていない。以降の節では名詞句における助数詞としての Stück が意味的にどのように寄与しているのかを検討する。そのための道具立てとして、機能的類型論における所有構文による修飾の位置づけを見ていくこととする。

### 3. 機能的類型論における所有構文による修飾

Zifonun (2010) はドイツ語の部分および疑似部分用法 (Pseudopartitiv) を機能類型論における修飾 (Modifikation) の一分類である量化 (Quantifikation) と考え、所有構文 (Possessivum) とは切り離している。Zifonun (2010) における部分と疑似部分の区別は N2 名詞句の指示性の有無による。

(21) Eine Tasse von diesem Tee; fünf der Kinder

(22) Eine Tasse heißen Tees; eine Menge von netten Leuten

(Zifonun 2010: 149)

Zifonun は本稿で述べるところの助数詞構文は、疑似部分構文の実現の一形態であると考えられる。確かに、助数詞構文はドイツ語の属格標識によって表された部分を表す語尾の消失した形式であるという歴史的な変遷が、Zimmer (2015) によって述べられている<sup>14)</sup>。そのため、ドイツ語の助数詞構文は、所有修飾の有するその他の種類の修飾と量化 (修飾) という異なる下位機能領域の間の連続的なつながりを示すと考えられる。しかしドイツ語の助数詞構文に所有の形式および意味は含まれていない。これを所有の標識を有する (22) と同一視してよいのかには疑問が残る。

類型論的には所有構文によって量化を表すことはほとんどないと Rijkhoff (2009) は主張するが、所有の形式を伴って量化を行うのがドイツ語の部分および疑似部分構文である。しかし、その際に量を担っているのは (属格などによる) 修飾要素の N2 ではなく被修飾要素 N1 である。つまり、数詞など量化子は量化

14) ドイツ語の属格語尾が消失したという文法化にまつわる主張は、長らく様々な先行研究でなされている (cf. Krifka 1989; Hentschel 1993 など)。

修飾要素であるはずが、統語的な主要部として現れているのだ。このような統語レベルでの修飾要素と被修飾要素が意味レベルにおいて逆転する現象は「依存転倒 (“**Dependenzumkehrung**“)」と呼ばれる (cf. Zifonun 2010: 129)。

(23) zwei von diesen Büchern; Hunderte von Zuschauern (Zifonun 2010: 129)

Zifonun は、数詞による典型的な量化に対して、ドイツ語の部分表現全般を非典型的な量化に位置づける。しかし本論は、助数詞構文が量化という下位範疇にのみ属するのではなく、量化以外の修飾の機能下位範疇にも所属しているにではないかという仮説を検討したい。

### 3.1. 修飾の機能的分類と所有構文

Rijkhoff (2004) の機能類型論的における名詞句の機能領域およびその下位範疇である修飾の分類に依拠して、Zifonun (2010) はドイツ語の所有修飾表現についても、**繋ぎ留め (verankernde)**、**質的 (qualitative)**、**階層分類 (klassifikatorische)** そして**量化修飾 (quantifikative Modifikation)** を考える。

(24) Hut meiner Schwester 【繋ぎ留め修飾】

(25) Mann der Tat 【階層分類修飾】

(26) Probleme großen Ausmaßes 【質的修飾】

(27) Eine Tasse von diesem Tee 【量化 (部分)】

(28) Eine Tasse heißen Tees 【量化 (疑似部分)】

Zifonun (2010: 149)

繋ぎ留め修飾は以下の様に規定される：

Bei verankernder Modifikation beruht die Bestimmung des Referenten der Gesamt-NP auf einer Gegebenheit ‚in der Welt‘, die von dem Referenten der Gesamt-NP verschieden ist, aber von der aus der Referent ermittelt werden kann.

位置づけ的修飾における NP 全体の指示対象の特定は、NP 全体の指示対象とは区別されるが、しかし、そこから指示対象が突き止められる‘(特定の) 世界にお

ける‘ある所与に基づいている。

階層分類修飾は名詞の示す概念集合の下位集合を形成する修飾である。(25)の例に即して言うと、名詞句全体で、男という概念の上位の集合から、そのうちの行為を行う男という下位の集合を表す。質的修飾はある次元、(26)で言えば(問題の)程度、を導入し、その次元における多寡を名詞の表す概念に加える修飾である。質的修飾のより基本的な形式は質的形容詞による名詞の修飾であり、例えば *kleines Problem* における *klein* による大きさという次元の導入およびその程度の低さ、すなわち小さいということを表現するものである。量化修飾は以下の様に説明される：

„Was QUANTIFIKATIVE MODIFIKATION angeht, **mit der die Kardinalität der Referenzmenge präzise oder unscharf ausgedrückt wird und deren prototypische sprachliche Form die Numeralia sind**, im Deutschen Zahladjektive wie *zwei, drei, hundert, viele* in *zwei/drei/ hundert/viele Bücher* [...]“ (Zifonun 2010: 129)

指示された量の基数性が厳密にまたは曖昧に表されそしてその典型的な言語形式は数詞であるような、量化的修飾に関係するのはドイツ語では *zwei/drei/ hundert/ viele Bücher* における *zwei, drei, hundert, viele* などの数形容詞である。(訳・強調筆者)

このような下位分類が提案される一方、分類間に境界線を引くことはある程度の抽象化が必要になると述べられており (cf. Zifonun 2010: 130)、厳密な区別は難しいと考えられる。Zifonun は助数詞構文を量化修飾に位置づけるわけであるが、繋ぎ止め修飾、階層分類修飾や質的修飾とも密接であるという仮説が立てられよう。なぜならば、*Stück* という語彙項目の部分という意味が空間的な位置づけと密接だからであり、また助数詞という要素が形状などの質や階層(クラス)を表現していると考えられるからである。以下第4節ではこの仮説に基づいて *Stück* の実際の用例を観察していく。

#### 4. 用例分析

本節では *Stück* の根本的な意味である「部分」が、上記の機能類型論的な修飾

の分類における、繋ぎ止め、階層分類、質的修飾にどのように割り当てられるのかを検討する。

**Stück** はこれまで多くの先行研究で言及されてきた助数詞の一つである。その下位類として、類別詞言語になぞらえて、類別詞として扱われることが多かったこと理由はすでに第2節で述べたとおりである。しかしながら **Stück** の共起する名詞は集合名詞のみでない。Löbel (1986) は意識的にこれを区別して、**Stück** に形状名詞の助数詞の分類を行った。しかしながら、この形状名詞がどのような形状を有しているのかということは不明確で、N2 に対して相対的であることは指摘されているとおりである。従って (29) のような例の分類を考える際、通常の部分構文との区別が非常に難しい。(29) は形式上、部分の標識を喪失している(同格)。しかしながら語彙的に部分の意味を有する **Stück** によって部分構文と同等の意味を有しているようにも見える。(30) の例においてもなぜ **Stück** が、数が不定の集合名詞の単位であるのかということ、依然として **Stück** の部分に関わる語彙的意味が健在であるからと説明できないであろうか。

(29) ein Stück Holz (6)' 【形状名詞】

(30) ein Stück Vieh (10)' 【類別詞】

また実際には N2 の位置には単数形(物質、集合または両価的名詞)だけではなく複数形も出現し、単数形の名詞においても不可算名詞だけではなく可算名詞までも現れ、**Stück** が用いられて量化される N2 名詞は先行研究において指摘された分類よりも、形態と意味において多彩であることが分かる。

《N2 名詞の分布：可算 - 不可算、個体 - 物質の対立》

(29) ein Stück Holz 【不可算】

(31) ein Stück Brot = (7) 【不可算 --- 可算】

(32) ein Stück Seife = (8) 【不可算 --- 可算】

(33) ein Stück Auto = (9) 【可算 --> 不可算】(Blühorn 2006: 68)

(30) ein Stück Vieh 【集合】

(34) 40 Stück Wäscheklammern = (11) 【複数名詞】(DWDS)

(35) fünf Stück **Hasen** = (12)

【複数名詞】(Bauer 1918: 267)

上記の破線が表すのは、当該名詞における典型的な可算名詞または不可算名詞への割り当てに基づき、その移り変わりを示したものである。例えば、(31)における **Brot** は不可算名詞であるということを学ぶのであるが、実際には **Brot** に直接量子が付加されることがある<sup>15)</sup>。(32)における **Seife** も一般に不可算名詞とされる。(33)の **Blühdorn** (2006)による例文は **Auto** のような典型的な可算名詞が N2 の位置に現れることを示している<sup>16)</sup>。彼は **ein Stück Auto** のような例に限らず、助数詞構文に現れる **Stück** を“Auxiliar-Substantiv”と呼称している<sup>17)</sup>(**Blühdorn** 2006: 55)。(34)および(35)で現れる複数名詞は先行研究ではもっぱら考察から外されている。これらは(30)の集合名詞が N2 に現れる用例と関連性を考えられそうだ。集合名詞にも、複数名詞にも、不定の数の対象の集合がある。しかし、違いは N2 名詞が本来的には可算名詞であることである。上記の例(32)、(33)、(34)、(35)は先行研究で言われてきた不可算の対象物を数えるという機能のみでは説明されない。修飾の機能類型論的分類における量化以外の機能が見出されることが予想される。

ひとつに質的修飾が関わっている可能性として考えられる。**Singulativmarker** としての **Stück** に大きさへの含意がある可能性を 2.3 節で指摘したが、これが正しく、助数詞用法にも共通に見いだされる性質であると仮定したら、(32)の用例を説明する手掛かりになるように思われる。**Stück** が大きさについて言及しているということならば、質的修飾を行っていることになるだろう。実際、レシピなどにおいて材料の数が言及されるような際にも、可算名詞の食物と共に **Stück** が用いられることがあるが(例: **Würfelzucker**; **Zimtrinde**; **Sellerie** など)、これらは小さ

15) **Stadtfeld** (2013: 92)では „Dual-Life-Substantiv“という用語が用いられている。

Sie kaufte fünf Brote. (= (186) **Stadtfeld** 2013: 92)  
 ‚Sie kaufte fünf Laibe Brot.‘

16) **Blühdorn** (2006)はこの時、**Stück** が後続する **Auto** を不可算名詞にする効果を有していること、そして下記のような例においては部分の読みが生じると指摘する。

Letzte Woche hatte er mit seinem Wagen einen schweren Unfall. Er prallte auf einen vor ihm fahrenden LKW. **Ein Stück Auto** wurde herausgerissen und auf die Gegenfahrbahn geschleudert. (=49) (**Blühdorn** 2006: 69)

17) これは“Auxiliar-Verben”（助動詞）と類推的な概念として考えられている (**Blühdorn** 2006: 55)。

さに起因して用いられていると言えるのではないか<sup>18)</sup>。

さらに Stück に階層分類修飾機能があることを部分的に支持する研究に Lehmann (2000; 2010) そして古くは Bauer (1912) がある。両者に共通する主張はドイツ語の Stück には存在物を分類する機能があるというものだ<sup>19)</sup>。この意味素性に基づく分類（類別）という機能が存在すると考えた場合、(33)、(34) や (35) における可算名詞の共起は意味素性における一致と考えることができるかもしれない。また (31) や (32) のような不可算に加えて可算用法も有するような名詞においても一致しているのかもしれない。これらは階層分類修飾の一部を担っているのではないか。

## 5. 結論

本論は Stück の意味および機能の広がりについて用例を観察してきた。この観察から Stück の有する複数の機能は〈部分〉という中心的意味から連続的に存在していると考える。また、存在物の部分を表す意味から存在物全体、すなわち単位を表すようになる意味変化の間には、Stück に含意される〈小さな存在物〉という意味を表す機能が仲介している可能性があることを示唆した。先行研究は Stück に類別詞という位置づけを行いながらも、Stück には極めて一般的な意味しかなく、いわゆる「類別（階層分類）」の機能には言及していなかった。Lehmann (2000; 2010) の指摘は類別機能の主張を支持するものである。Zifonun (2010) の述べる、助数詞構文（（疑似）部分格構文）が非典型的な量化形式であるという主張は所有修飾の形式を伴う量化が非典型的であるということであった。これに加えて、質的修飾および階層分類修飾機能も同時に有しているというような意味でも非典型性を示している可能性を示唆した。

18) 日本語の「つ」や「個」などが一般的な助数詞として用いられ、さらに典型的には小さい物に対して用いられることも類似している。

19) その際に、カウンターパートの存在を示していることは重要な点である。この対応物とはすなわち Mann のことである（例：drei Mann Besatzung）。ドイツ語の Stück および Mann は [± human] の素性において対立しており、まさに類別詞言語に見られるような意味特徴による存在物の分類を行っているという。

## 参考文献

- Bauer, Hans (1912): Noch einmal die semitischen Zahlwörter. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. Vol. 66, Harrassowitz Verlag S. 267-270.
- Blühdorn, Hadarik (2006): Zur Semantik von Numerus und Zählbarkeit im Deutschen. In: *Grammatische Untersuchungen, Analysen und Reflexionen. Festschrift für Gisela Zifonun*. Narr: S. 53-77.
- Grimm, Jakob / Wilhelm Grimm (1854): *Deutsches Wörterbuch*. Leipzig: S. Hirzel.
- Hentschel, Elke (1993): Flexionsverfall im Deutschen?: Die Kasusmarkierung bei partitiven Genetiv-Attributen. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik*. 21-3 S.320-333.
- Imai, Mutsumi/ Kanero Junko (2021): How classifiers affect the mental representation of entities. In : *Numeral Classifiers and Classifier Languages: Chinese, Japanese, and Korean*. Routledge S.197-230.
- Krifka, Manfred (1989): *Nominalreferenz und Zeitkonstitution Zur Semantik von Massentermen, Pluraltermen und Aspektklassen*. München: Wilhelm Fink Verlag.
- Lehmann, Christian (2000): On the German numeral classifier system. In: Schaner-Wolles, Chris, Rennison, John R. & Neubarth, Friedrich (hrsg.) *Naturally! Linguistic studies in honour of Wolfgang Ulrich Dressler presented on the occasion of his 60th birthday*. Torino: Rosenberg & Sellier. S. 249-253.
- Lehmann, Christian (2010): On the function of numeral classifiers. In: Floricic, Franck (hrsg.), *Essais de typologie et de linguistique générale*. Mélanges offerts à Denis Creissels. Lyon: École Normale Supérieure. S. 435-445.
- Löbel, Elisabeth (1986) : *Apposition und Komposition in der Quantifizierung: Syntaktische, semantische und morphologische Aspekte quantifizierender Nomina im Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Murelli, Adriano (2017): Numerativkonstruktion. In Ludwig M. Eichinger/ Angelika Linke (hrsg.) *Grammatik des Deutschen im Europäischen Vergleich: Das Nominal*. Teilband 2: Nominalflexion, Nominale Syntagmen. S.1698-1734.
- Rijkhoff, Jan (1991): Nominal Aspect. In: *Journal of Semantics*. 8 S. 291-309.
- Rijkhoff, Jan (2004): *The Noun Phrase*. Oxford University Press.

- Rijkhoff, Jan (2009): On the co-variation between form and function of adnominal possessive modifiers in Dutch and English. In: W.B. McGregor (hrsg.) *The expression of possession*. Berlin: Mouton de Gruyter. S.51-106.
- Seržant, Ilja A. (2021): Typology of partitives. In: *Linguistics*. 59 (4) De Gruyter S.881–947.
- Stadtfeld, Tobias (2013): Zur Bestimmung der Zählbarkeit deutscher Substantive. In: *Bochumer Linguistische Arbeitsberichte*. Inaugural-Dissertation zur Erlangung des Grades eines Doktors der Philosophie in der Fakultät für Philologie der Ruhr-Universität Bochum.
- Wiese, Heike (2011): Numeral-Klassifikatoren und die Distribution von Nomen: Konzeptuelle, semantische und syntaktische Aspekte. In: Wilfried Kürschner (hrsg.) *Lang [= Littera. Studies in Language and Literature 2]* Frankfurt a.M., S. 73-105.
- Yoshida, Mitsunobu (2006): Klassifikatoren im Japanischen und im Deutschen Eine kontrastive Analyse. In: *Neue Beiträge zur Germanistik*. 131 S.29-46.
- Zifonun, Gisela (2004): Plural und Pluralität im Sprachvergleich, insbesondere zwischen dem Deutschen und dem Ungarischen. In: Czicza, Dániel/Hegedűs, Ildikó/Kappel, Péter/Németh, Attila (hrsg.): Wertigkeiten, Geschichten und Kontraste. *Festschrift für Péter Bassola zum 60. Geburtstag*. S. 397-415.
- Zifonun, Gisela (2010): Possessive Attribute Im Deutschen. In: *Deutsche Sprache* 38, 2 S. 124-153.
- Zifonun, Gisela (2012): Komposition (oder Halbaffigierung) zum Ausdruck von Nominalaspekt: *Schmuckstück, Glücksfall und Zuckerwerk*. In: *Das Deutsche als kompositionsfreudige Sprache. Strukturelle Eigenschaften und systembezogene Aspekte*. Berlin: De Gruyter. S. 101-133.
- Zimmer, Christian (2015): Bei einem Glas guten Wein (es): Der Abbau des partitiven Genitivs und seine Reflexe im Gegenwartsdeutschen. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. 137. 1 S. 1-41.